

袋井市教育委員会・掛川市教育委員会共催特別展

# 馬伏塚城と高天神城展



現在の馬伏塚城



現在の高天神城

## はじめに

袋井・掛川市域の戦国時代を語るうえで、馬伏塚城と高天神城の攻防戦は欠くことのできない歴史のひとつです。城主はともに小笠原氏であるばかりでなく、天正2年(1574)、高天神城が武田勝頼の支配下になると、馬伏塚城は徳川家康の高天神城攻略の前線基地となります。関係の深い二城の歴史をひもとくことにより、袋井・掛川両市域の戦国時代を解明することを目的とした展示会です。



# 攻める 馬伏塚城

## 城の歴史

遠江小笠原氏ゆかりの平山城です。城域は了教寺北方の堀切から、南端の諏訪神社のある本曲輪にいたる広大な範囲となります。江戸時代の絵図(古城之図)によると城の周囲は深田と記載され、戦国時代には沼地が広がっており、天然の要害地に城が築かれていました。永禄12年(1569)頃、衰退した今川氏にかわり徳川家康が遠江の支配を行うようになると、小笠原氏も徳川家の家臣となりました。この時の城主は小笠原氏興といわれています。天正2年(1574)高天神城が武田勝頼の支配下に入ると、武田方となった小笠原氏にかわり、すぐさま馬伏塚城は高天神城を攻めるための徳川方の前線基地として大改修されました。



写真1



写真2



写真3

写真1

台風により水没した馬伏塚城の様子です。かつてはこのような水堀に囲まれていたと思われます。

写真2

本曲輪の東面に残る土塁です。北端の幅が広いので、発掘調査で確認された北側の土橋を見張るための櫓台があったと推定されています。本曲輪内の発掘調査では北側中央に虎口(出入口)、が確認されましたが、建物跡などは発見できませんでした。

写真3

本曲輪西半部北面の土塁です。本曲輪内の発掘調査では、16世紀前葉は墓地、16世紀中葉では礎石建物、16世紀後葉に土塁が造られたことが判明しました。この成果から、本・西曲輪を含めた南の曲輪群は、天正2年以後に徳川家康により改修されたことが明らかになりました。





## 城の構造について

馬伏塚城は南北600m、東西160mの規模で、湿地に突き出た標高5mの舌状台地の先端にあります。今は埋められていると推定されていますが、幅10~15mの二本の大堀切により分断された、伝居屋敷曲輪と北の曲輪群、舟入曲輪より南は水堀に囲まれた南の曲輪群からなります。発掘調査の成果から南曲輪群は土塁に囲まれた防御性の高い曲輪群で、天正2年以降に徳川家康により墓地や寺院から改修されたことが判明しました。北曲輪群は二つの土塁に囲まれた曲輪があり、ここに天正2年以前の小笠原氏居館があったと推定されています。伝居屋敷曲輪は最も広い曲輪で、天正2年以前の小笠原氏段階では集落、徳川氏段階では兵の駐屯地としての曲輪になったと思われます。江戸時代の絵図(古城之図)からは、城の周囲に水堀跡の深田、土塁の存在が読み取れます。



図1 馬伏塚城構造図(作図:加藤理文、一部加筆)

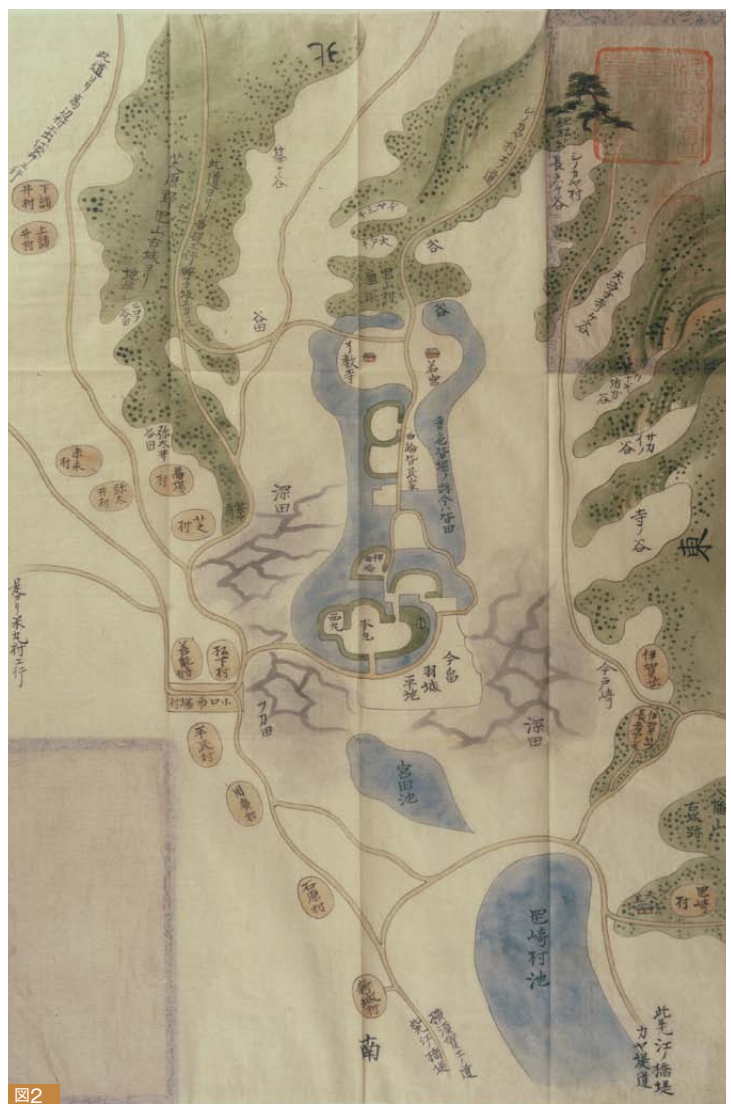


図2 浅野文庫古城之図馬伏塚城(広島市立中央図書館蔵)





写真4



写真5



写真6



写真7

写真4

北曲輪の北面の土塁です。北曲輪では北面の土塁の残りが良く、16世紀前葉に小笠原氏の居館があったと推定されています。16世紀後葉になると、徳川家康の陣所として土塁がかさあげされ改修されたと思われます。

写真6

本曲輪東側を取り囲むように設けられた広い曲輪です。江戸時代の絵図(古城之図)には羽城と記載されており、城の端の曲輪と認識されていました。堀との比高差はあまりないため、水堀(水路)に面していた船着場と考えられています。

写真5

北曲輪北側の堀切推定地です。谷の先端の台地の幅の狭い箇所に堀切を入れたと思われますが、現在は道路と宅地造成のために埋め立てられ、遺構を見ることはできません。同様な堀切は了教寺北側の谷奥にもあったと思われます。

写真7

本曲輪北側の虎口(出入口)下で、発掘調査により確認された土橋です。本曲輪北側の内堀をまたぐ土橋で、北側の曲輪からの通路としては唯一のもので、地山を掘り残した構造をしており、幅2mに満たない狭い土橋で、多数の兵士が一度に渡れない工夫がしてあります。





# 守る 高天神城

## 城の歴史

高天神城は掛川市上土方嶺向に所在する鶴翁山かく おう ざんに築かれた山城で、東西2つの峰を中心としたあたかも二つの城が連なったような、所謂「一城別郭式」と呼ばれる山城です。築城年代は定かではありませんが、16世紀前葉頃には今川氏家臣の福島氏い ち じ ょ う べ つ かくがいた記録があります。永禄3年(1560)桶狭間合戦後に今川氏が衰退し始めると、小笠原氏助(長忠)お が さ わ ら う し す け な が た だを城主として徳川家康配下の城となりました。天正2年(1574)武田勝頼た け だ かつ よりが高天神城を攻めると、家康と織田の援軍が間に合わず、小笠原氏助が降伏して武田方の城となりました。徳川家康はすぐさま奪還作戦を開始し、同年馬伏塚城、天正4年横須賀城、天正7~8年に高天神六砦を築城し、天正9年(1581)にやっと落城させることができ、その後は廢城となりました。



写真8



写真9



写真10

写真8

小笠原山丘陵が東側に突き出た自然要害の地、急峻な舌状丘陵の先端にあります。南には遠く太平洋を臨むことができ、菊川の河口付近には戦国時代の港である浜野浦もあり、交通の要衝地に築かれた城であることが分かります。

写真9

本丸の発掘調査では掘立柱建物から石敷建物に変遷した長屋が発見されました。土間ではなく、石敷きとしたのは湿気を嫌うもの、たとえば火薬を保管していた建物(煙硝蔵)ではないかと考えられます。本丸には他にも武器や兵糧を保管した蔵があったと思われます。

写真10

本丸の発掘調査では、本丸と同様に石敷建物跡が発見されました。これの建物も火薬を保管していた建物(煙硝蔵)ではないかと考えられます。本丸の場的曲輪には兵糧や武器を保管した建物があり、籠城戦を支えた物資保管のための曲輪であることが分かりました。



## 城の構造について

高天神城の構造は南北450m、東西500mの規模で、三方を崖に囲まれた標高130mの舌状丘陵の先端にあります。二つの峰を中心とし、周囲の丘陵上や谷に階段状の曲輪を配した大規模な山城です。西の峰は西の丸、北側にのびた尾根筋に二の丸と堂の尾曲輪、先端に井楼曲輪があり、曲輪の西斜面に横堀と土塁を配した防御力の高い曲輪群となっています。東の峰は本丸で東の先端には小笠原与左衛門が籠もったとされる三の丸、南の谷(鹿ヶ谷)間には大手道が設けられ、谷の東と西斜面には多数の兵力を駐屯するための階段状の曲輪が配置されています。江戸時代の絵図(古城之図)からは、今は確認できない曲輪や城内道、土塁の存在が読み取れます。

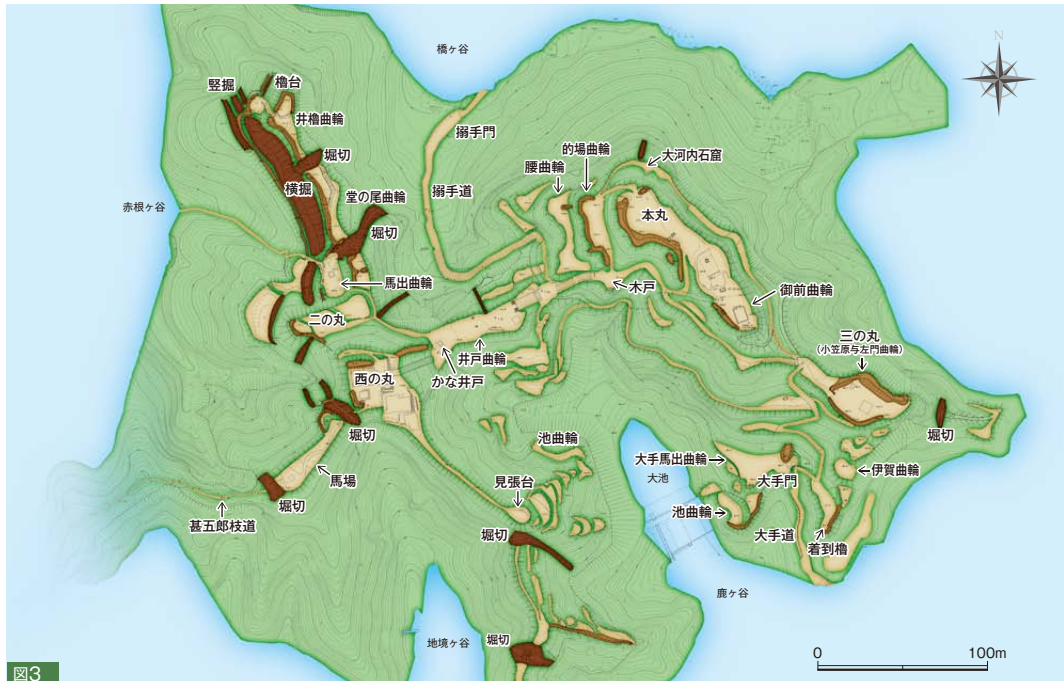


図3

高天神城構造図



図4

浅野文庫古城之図高天神城(広島市立中央図書館蔵)



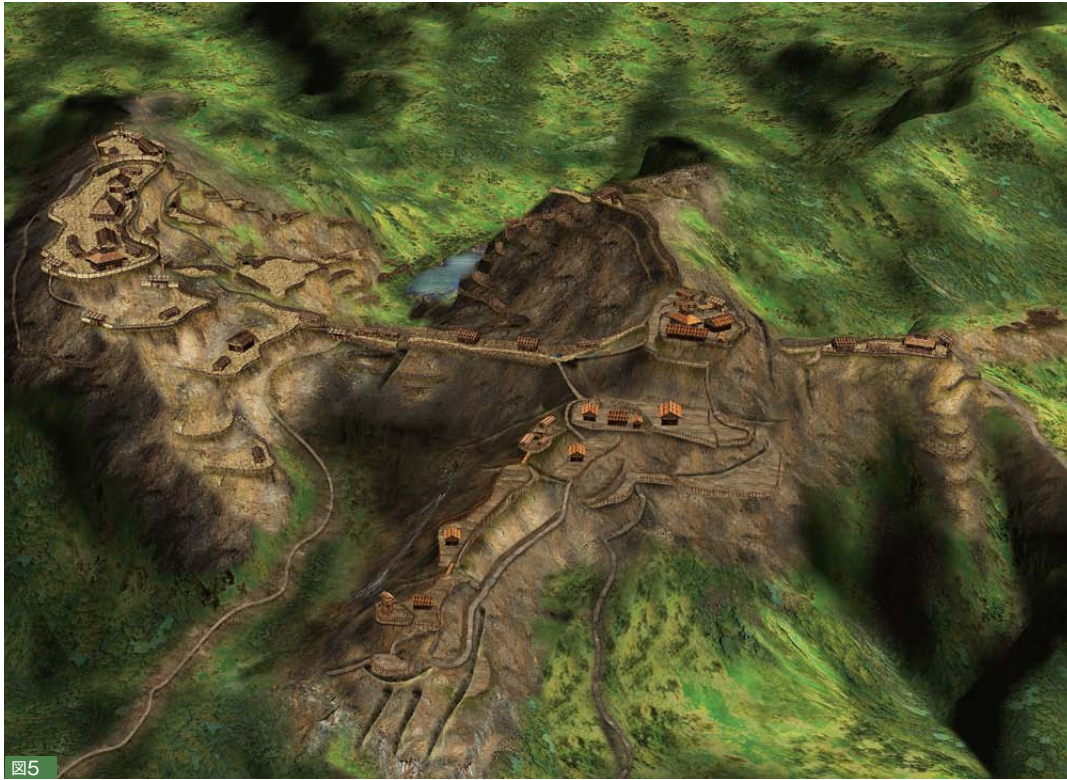


図5

高天神城鳥瞰復元CG(加藤理文氏考証 成瀬京司氏作成 碧水社提供)



写真11

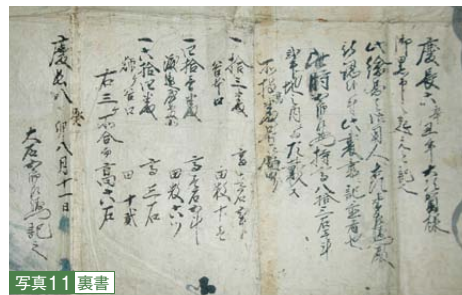


写真11 裏書

慶長6年(1601)地元の村役人により横須賀藩に提出された高天神元宮並び山絵図の控えで、慶長8年大石五郎左衛門が記したことが分かります。落城後の本丸や西丸、二の丸の状況が分かるだけでなく、堂の尾曲輪の堀切や、かな井戸も描かれています。

二の丸の北にある堂の尾曲輪の発掘調査では、高い土塁や深い横堀の姿が明らかになりました。合戦の時には常に激戦地となった場所ですが、天目茶碗や茶入れ、すり鉢、鍋など、生活感を感じさせる遺物が出土しており、籠城兵たちが使ったものと思われます。



写真12





写真13



写真14



写真15

写真13

二の丸の発掘調査では曲輪内が3段に築かれていることが判りました。東から西にかけて高くなり、西端は土塁に囲まれているので物見のための井楼櫓があったと推定されています。柱穴や礎石の数からみて、多数の建物があり主要曲輪のひとつであったことが分かります。

写真14

西峯最先端となる井楼曲輪の発掘調査では、曲輪内で柱穴が見つかりました。曲輪名のとおり物見のための井楼櫓があったと考えられます。

写真15

二の丸下に掘られた横堀の発掘調査では、堀内より畝状の高まりが見つかっています。これは堀内の敵兵の移動を遮るための施設で、敵堀とも呼ばれています。



写真16



写真17

井戸曲輪にある現在唯一城内に残るかな井戸は、固い地盤をくりぬいて造られています。籠城した兵たちの貴重な飲水になっていたと思われます。

徳川氏の軍監として在城していた大河内政局は、天正2年小笠原氏降伏の際、武田方に寝返ることも城から退却することもしなかったため、武田方に捕らえられ石(土)牢に監禁されました。天正9年に家康が高天神城を取り返すと、足かけ7年監禁の後解放されたと伝えられています。



# 古文書 から見た 遠江小笠原氏

遠江小笠原氏は江戸時代の記録(「寛政重修諸家譜」など以下「諸家譜」と呼ぶ)によると信濃小笠原氏の流れを汲むものと思われていましたが、最近の研究では遠江独自の小笠原氏の流れが考えられるようになりました。小笠原氏の名前が見える確実な最古の古文書は、天文11年(1542)の華厳院に宛てた小笠原右京進春茂の寄進状です。春茂は「諸家譜」では二代目右京進春儀とされた人物と見られています。ちなみに「諸家譜」での初代は信濃小笠原貞朝の子長高としていますが、古文書など具体的な史料はないため疑問視されています。

三代目は春茂の子氏興で、氏清ともいわれています。天文13年(1544)の華厳院への寄進状、天文17年(1548)の龍巢院への寄進状などではすべて氏興としていっているので、氏清名の古文書は確認できません。

四代目の氏助については長忠ともいわれていますが、永禄12年(1569)の龍巢院への寄進状では与八郎と書かれおり、別の古文書では与八郎氏助とされるので、長忠の名前の見える古文書は確認できません。なお天正2年(1574)の華厳院への寄進状と宝珠寺への諸役免除状、天正3年(1575)の法多山一乗院への諸役免除状などすべて小笠原信興、あるいは弾正少弼信興の名前の古文書が発給されており、天正2年高天神城落城後の古文書であるため、氏助が武田勝頼に降ったことにより改名し、役職名も勝頼からもらったと思われる。信興の当地における古文書は天正3年以降なくなり、天正4年の駿河での古文書の存在が確認できるため、高天神城に在城していたのは天正4年頃までといわれています。

(参考文献 本多隆成 2001「戦国期の浅羽地区と小笠原氏」『十二所居館』浅羽町教育委員会)

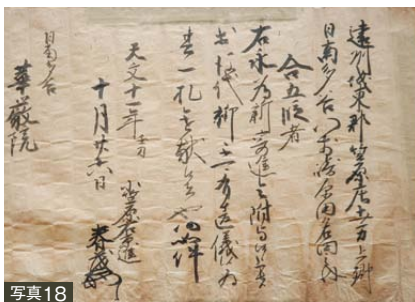


写真18

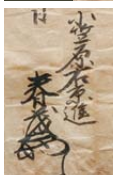


写真18 花押

## 小笠原春茂寄進状

遠江小笠原氏二代春茂が天文11年(1542)に華厳院に所領を寄進した古文書です。春茂の名前が確認できる貴重な史料です。

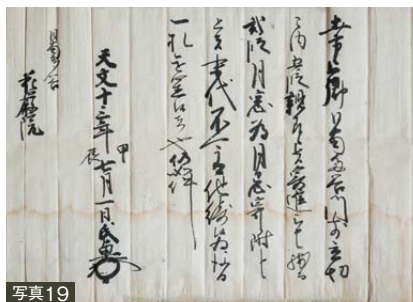


写真19



写真19 花押

## 小笠原氏興寄進状

三代氏興が天文13年(1544)に華厳院に所領を寄進した古文書です。天文11年の春茂寄進状から見ると天文12年に高天神城主の代替わりが行われたかもしれません。

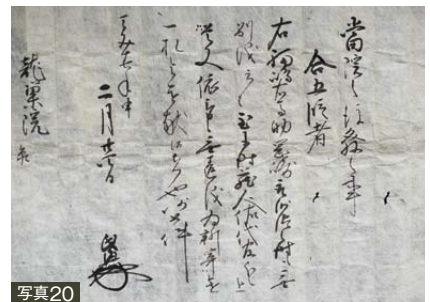


写真20



写真20 花押

## 小笠原氏興寄進状

氏興が天文17年(1548)に龍巢院に所領を寄進した古文書です。氏興の勢力が馬伏塚城周辺にあったことが分かる史料です。



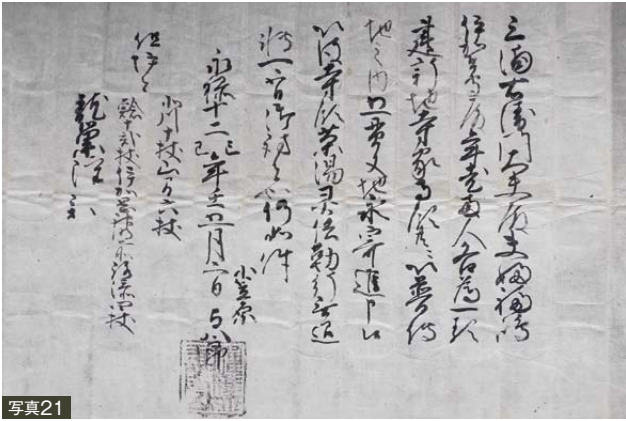


写真21

写真21 黒印

### 小笠原氏助寄進状

氏興の子で四代氏助が永禄12年(1569)に龍巢院に所領を寄進した古文書です。与八郎とは氏助のことで、国人領主としては珍しく黒印が押してあります。

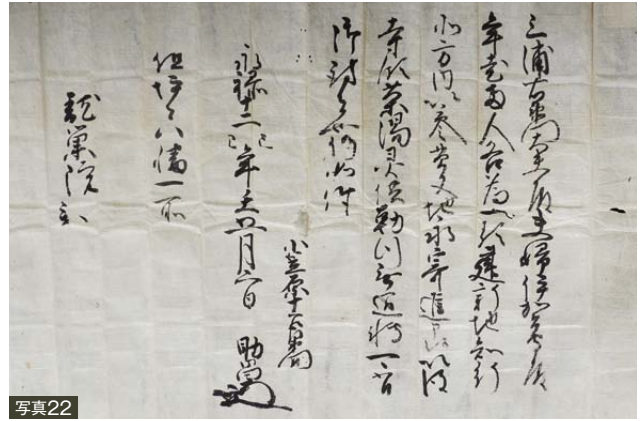


写真22

写真22 花押

### 小笠原助昌寄進状

助昌が永禄12年(1569)に龍巢院に所領を寄進した古文書です。助昌とは今川氏家臣福島助昌(しほしますけ)と同一人物とされ、本文書から元高天神城主福島氏と小笠原氏の強いつながりが伺われます。

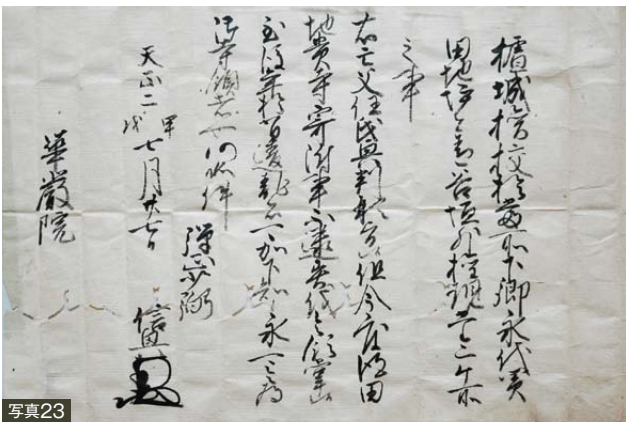


写真23

写真23 花押

### 小笠原信興寄進状

信興が天正2年(1574)に華嚴院に所領を寄進した古文書です。信興とは氏助が武田勝頼の軍門に降った後の名前、同時にもらった役職名である弾正少弼についても書かれています。



写真24

### 小笠原信興諸役免除状

正林寺文書を江戸時代末~明治時代前半に写した本のなかに、信興が天正2年(1574)に宝珠寺に諸役を免除した古文書が確認できます。本文書にも弾正少弼が書かれています。花押や書体を見るとかなり正確に写していることが分かります。

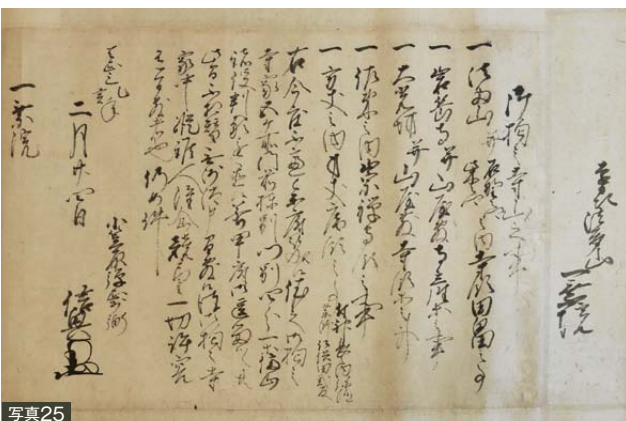


写真25

写真25 花押

### 小笠原信興諸役免除状

信興が天正3年(1575)に法多山一乗院に諸役を免除した古文書です。本文書にも小笠原弾正少弼と書かれており、信興が小笠原氏であることが分かります。

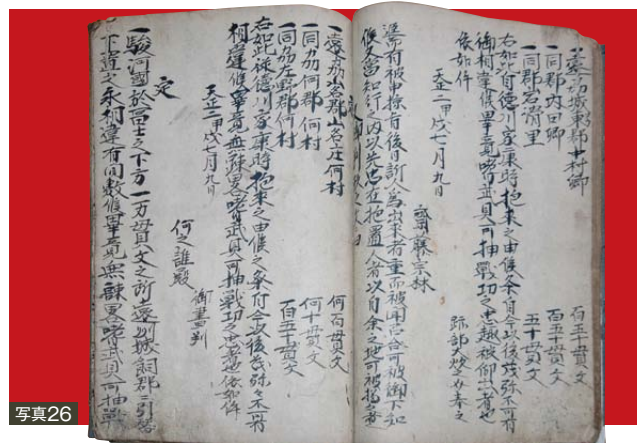
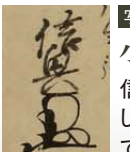


写真26

### 高天神記(写し)

天正2年(1574)、勝頼の高天神城攻めの際に討ち死にした本間氏清・丸尾義春兄弟の子孫本間清定が、享保21年(1736)に高天神城の戦いをまとめたものが高天神記です。これはその写しです。



# 武田勝頼、高天神城を落とす

天正2年7月、難攻不落を誇った高天神城も、武田勝頼率いる武田の大軍に包囲され、織田信長の救援軍が間に合わず、城を守っていた小笠原氏助らは勝頼の軍門に降りました。この時の激戦で袋井出身の武将である本間氏清・丸尾義清兄弟が高天神城堂の尾曲輪で討ち死にしたといわれています。勝頼は氏助を信興と改名させ家臣とすると共に、横田甚五郎尹松を城番としました。なお、華嚴院に伝わる元龜3年(1572)の禁制文書は武田信玄が発給したもので、この文書から遠江侵攻を企てていた信玄が高天神城を重要視していたことが分かります。高天神城落城後も勝頼が法多山一乗院に発給した所領安堵状に見られるように、小笠原氏の旧領地に支配の手を伸ばしていたことが分かります。

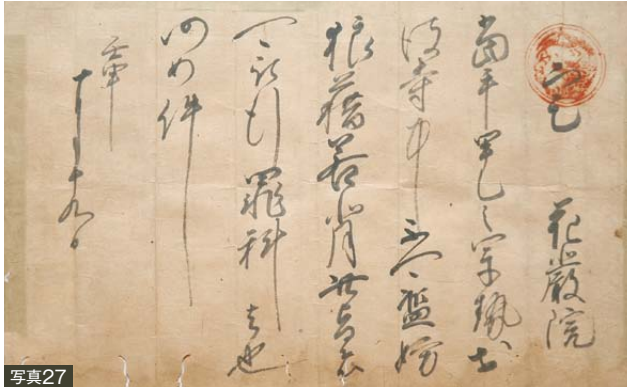


写真27 武田家禁制札

信玄が元龜3年(1572)華嚴院に兵の乱暴狼藉などを禁止した古文書です。武田家の龍の朱印が押されており、門前に掲げられた札かもしれません。

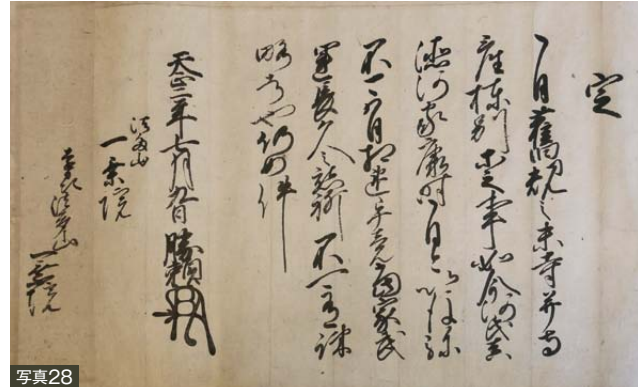


写真28 武田勝頼安堵状

勝頼が天正2年(1574)に法多山一乗院に所領を安堵した古文書です。禁制文書ではないため朱印ではなくて花押が記されています。

# 徳川家康、高天神城を奪い返す

天正4年(1574)、家康は勝頼が織田・徳川連合軍に大敗を喫した長篠合戦直後、馬伏塚城をあしがかりとして横須賀城を大須賀康高に命じて築城し、天正7年(1579)には小笠山砦や岡崎の城山、三井山砦などを修築して、着々と包囲網を狭めました。最後の仕上げに能ヶ坂砦、火ヶ峰砦、中村城山砦、獅子ヶ鼻砦を築き、先の小笠山砦と三井山砦を合わせた高天神六砦で高天神城を包囲し、武田方の補給路を断ちました。天正9年(1581)3月、徳川家康は足かけ7年の歳月をかけ、やっと高天神城を武田勝頼の手から奪い返すことができました。高天神城落城後は必要でなくなった高天神城、馬伏塚城、六砦は廃城となり、港をもつ横須賀城が徳川方の城として残され、戦功のあった大須賀康高が城主となりました。

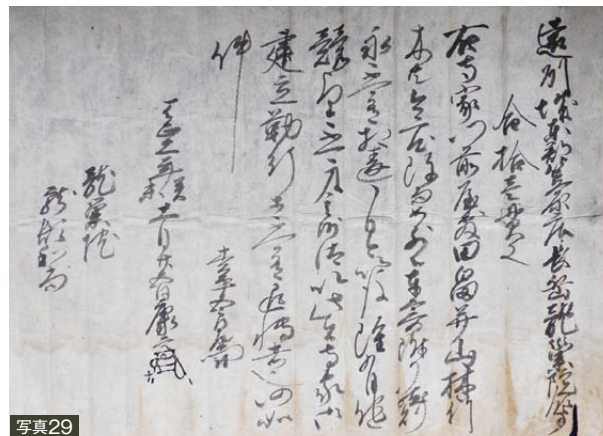


写真29 花押

大須賀康高寄進状

徳川家康重臣の康高が天正11年(1583)に龍巢院に所領を寄進した古文書です。高天神城落城後1年経過してから発給された文書で、徳川家康が当地を安定して支配するのに1年かかったことが分かります。



# 馬伏塚城と高天神城の略歴

年 代	馬伏塚城と関連事件	高天神城
1510 (永正7)	馬伏塚城これ以前に築城か。斯波方の内応に備え本間宗李馬伏塚城に入る。内応者は小笠原氏か。	1510年以前は福島助春が城主。
1521 (大永1)		この頃小笠原春茂城主になる。
1542 (天文11)		小笠原春茂華厳院に所領を寄進する。
1544 (天文13)		この頃小笠原氏興城主になる。 小笠原氏興、華厳院に所領を寄進する。
1548 (天文17)	小笠原氏興龍巢院に所領を寄進する。	
1560 (永禄3)	桶狭間合戦で織田信長、今川義元を討つ。	
1564 (永禄7)		この頃小笠原氏助城主になる。
1568 (永禄11)	武田信玄に攻められ今川氏真是駿府より懸川城に移る。	この頃徳川家康小笠山砦築城か。
1569 (永禄12)	この頃馬伏塚城主小笠原氏興、家康に属す。 家康、懸川城を攻め落城させ、今川氏滅ぶ。 小笠原助昌龍巢院に所領を寄進する。 小笠原氏助龍巢院に所領を寄進する。	この頃高天神城主小笠原氏助、家康に属する。
1571 (元亀2)		信玄、高天神城を攻める。 国安河の戦いで敗れ退却する。
1572 (元亀3)	三方原合戦で家康、信玄に大敗を喫す。	三方原合戦に小笠原氏助も参戦か。
1573 (天正1)	信玄三河野田城で没し、武田勝頼が家督を継ぐ。 勝頼、遠江に侵攻するため諏訪原城を築く。	
1574 (天正2)	家康、高天神城に対抗するため馬伏塚城を改修し、 大須賀康高を守将とする。 馬伏塚城改修に備え家康、十二所館に陣を置くか。	勝頼に攻められ小笠原氏助降伏し、本間氏清・ 丸尾義清兄弟討ち死。氏助、信興と改名か。 小笠原信興、華厳院に所領を寄進する。
1575 (天正3)	長篠合戦で勝頼、織田・徳川連合軍に大敗を喫す。 すかさず家康、諏訪原城を攻略する。	
1576 (天正4)	この頃家康、横須賀城を築城し、大須賀康高を 守将とする。	
1577 (天正5)	勝頼、横須賀城まで出陣するが、家康に敗れ 退却する。さらに、小山城に勝頼が出陣したので、 家康馬伏塚城に入る。	
1578 (天正6)	家康、勝頼来襲の報を聞き、馬伏塚城に入る。	渥美源五郎首取り坂の戦いで功績をあげる。
1579 (天正7)		大須賀康高、国安河の戦いで武田方を破る。 家康、小笠山砦を再び改修する。 この頃三井山砦と岡崎の城山も築かれたか。
1580 (天正8)	家康、横須賀城に入り、高天神城を攻めた。	家康、能ヶ坂砦、火ヶ峰砦、中村城山砦、 獅子ヶ鼻砦を築かせ六砦として包圍網を完成する。
1581 (天正9)	高天神城落城につき馬伏塚城も廃城か。 以後当地の家康方の拠点城郭は横須賀城となる。	家康、高天神城を囲み落城させる。岡部長教以下 諸将も討ち死した。落城後は廃城となった。



# 馬伏塚城と高天神城関連の 城跡と墓を巡る



袋井・掛川市域には馬伏塚城と高天神城だけでなく、六砦などの城跡、小笠原氏などの武将の墓が残されています。これらの城跡や墓を巡ることにより、より馬伏塚城と高天神城についての理解が深まると思いますので、ぜひとも訪れてみてください。

## ① 十二所館



十二所館は発掘調査により南北130m東西85mの範囲で堀と土塁が巡らされていた中世寺院であることが分かりました。堀は土塁の外と内の両方に巡らされている強固なもので、寺院も動乱の時期に武装化されていたことがわかります。天正2年(1574)高天神城が武田勝頼の支配下に入った時期に、南側の堀中央に馬出状の出入口(虎口)が新たに造られました。この施設の東側の堀底には木杭が多数打たれており、堀から虎口に攻め寄せてくる敵兵を防いだ施設とも考えられます。寺にこのような施設はいらないので、馬伏塚城を築城している最中、徳川家康の陣所として使われた可能性が指摘されています。

所在地 袋井市浅名

## ② 岡崎の城山



馬伏塚城の南東、小笠山丘陵南西山麓端にあります。わずか二つの曲輪からなる小さな城ですが、鉄砲や弓矢を効率的に当てるための折れのある堀と土塁が見られます。本曲輪に入るには幅の狭い土橋を渡らなければなりません。北斜面に戦国時代では最新の築城技術による横堀があります。城の周囲は現在水田ですが、遠州灘に通じる水路があったと推定されます。城主は地元武将の四ノ宮右近と伝承されていますが、今の城の特徴は戦国時代末期の姿を留めており、馬伏塚城や横須賀城と共に高天神城攻略のための水路を利用した補給基地としての役割が考えられます。天正9年(1581)高天神城落城後は使命を終え廃城になりました。

所在地 袋井市山崎字岡崎

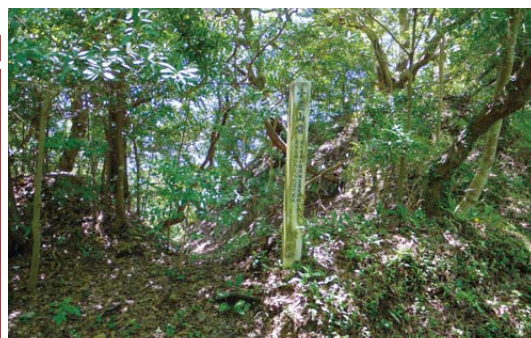
## ③ 横須賀城



横須賀城は武田勝頼に奪取された高天神城を攻撃すべく、天正4年(1576)前後徳川家康の命により家臣の大須賀康高が築城したといわれています。馬伏塚城が内陸にあるのに対して横須賀城は港が近くにあったため、兵士や兵糧を海上輸送するのに便利な地であったと思われます。現在の城は近世城郭の姿をなしているため、戦国時代の城の姿を見ることはできませんが、本丸、北の丸ぐらいの範囲が戦国時代の城域だったと考えられます。三日月池や牛池などは戦国時代にあった空堀を、天正18年(1590)城主となった豊臣秀次家臣渡瀬繁詮が堀幅を広げ、石垣を積み、天守を築き近世城郭基礎となるべく改修したといわれています。

所在地 掛川市西大淵

## ④ 小笠山砦



小笠山砦が最初に築かれたのは、永禄11年(1568)徳川家康が今川氏真家臣で高天神城主小笠原氏助と掛川城に逃げてきた氏真を分断するためといわれています。天正2年(1574)高天神城が武田勝頼の支配下に入ると、天正7年(1579)これを攻めるべく徳川方の最前線基地(高天神城包围六砦)として改修されました。城は標高260mもある小笠山山頂の小笠神社より西に延びた尾根筋を城域とし、笹ヶ峯御殿と呼ばれる本曲輪の廻りには横堀が巡らされ、本曲輪の東西に延びた尾根筋には、堀切により分断された多数の曲輪が残されています。六砦の中では一番規模が大きく、家康の陣所として使われたといわれています。

所在地 袋井市掛川市入山瀬



5

## 能ヶ坂砦



高天神城から北北東約2km、県道掛川大須賀線西側の丘陵上に築かれた砦です。ここは、小貫地区と下土方地区の境にあたり、元々番所が置かれていたと言われています。天正8年(1580)6月に徳川家康が砦を築かせ、本多豊後守が守備したとされています。現在は山林と一部茶畑になっており、開発のため砦の本体や山麓の残存状態は良くありません。山頂部に二つの主曲輪、山腹に階段状の曲輪があったとされています。南東方向に延びた尾根筋つづきには火ヶ峰砦があります。砦の付近には掛川城や相良方面に至る街道があり、火ヶ峰砦と共に高天神城より北、東方面の陸路を守備した砦であったと思われます。

所在地  
掛川市  
小貫字能ヶ坂

6

## 火ヶ峰砦



高天神城の東北東約1.5kmに位置し、掛川市中方、下土方、岩滑、中地区の境とする標高65mの丘陵上に築かれた砦で、六砦の中で最も高天神城に近い位置にあります。天正8年(1580)6月に築かれ、大須賀康高が守備したとされています。北側の下土方と中方地区の一部地域は茶園造成のため削平され、主郭とされる部分のみが残存しています。南側の中方、岩滑、中地区については、山林となり城の遺構が残存しています。東西方向に延びた狭い尾根筋に、曲輪や堀切を配した山城であったとされていますが、砦の規模は定かではありません。西側の尾根続きの丘陵には、天正7年に徳川家康が陣所とした安威砦があります。

所在地  
掛川市下土方、  
中方、岩滑、中

7

## 獅子ヶ鼻砦



高天神城より東へ約3kmの小笠平野中央で半島状に突き出た、標高44mを測る舌状丘陵先端に築かれた砦です。東側には菊川が流れており、河川を利用した兵糧の運搬に便利な場所にあります。元龜2年(1571)の徳川方の小笠原氏助と武田信玄が戦った際と、天正4年(1576)の徳川方の天野宮内右衛門と武田方との戦いの際に利用された記録があります。天正8年には六砦のひとつとして改修され、大須賀康高が守備していました。南北に延びた痩せ尾根の最高所に主郭があり、東にのびた尾根筋に階段状の曲輪や堀切があり防御を固めています。主郭の北側には少し広い曲輪があり、兵の駐屯地として利用されていたのでしょう。

所在地  
掛川市岩滑、  
菊川市大石

8

## 中村城山砦



高天神城より東南へ約3kmの現在は独立丘陵である高塚山に築かれた砦です。砦の南側は菊川に面した入江になっており、海運による兵糧運搬の港機能をもつ重要な砦です。築城は天正8年(1580)10月徳川家康の命により、堀を作り、高土井を築き、高塀を設けたといわれています。山頂部を櫓台とし、西に延びた尾根筋に階段状の曲輪を配した小規模な山城ですが、北側の尾根つづきには雑賀館や帝積山砦があり、広域な山城群を形成しています。六砦の中で唯一発掘調査が実施されており、南側には深く広い堀が確認されています。現在台地頂上部から山裾にかけては山林となっていますが、周辺部は宅地化が進んでいます。

所在地  
掛川市中

9

## 三井山砦



高天神城より南へ約3kmの小笠山丘陵の南へ張り出す台地の先端、標高89mの三王山に築かれた砦です。西および北側は尾根続きとなっていますが、東側は小笠平野が一望でき、南側は遠州灘を望み、横須賀城に至る街道がありました。天正7年(1579)10月徳川家康の命で築かれたとされていますが、その前年から三井山周辺での戦いがあった記録があることから、天正7年以前に築城されていたとも考えられています。現在は茶畑等の開墾により一部削平されていますが、遺構の残存状況は良好です。南北方向に延びた丘陵上に7つの主曲輪があり、土塁や堀切で防御されている高天神城の南方を守備した要の砦です。

所在地  
掛川市大坂

10

## 国安河の戦い



国安河は高天神城の合戦において、常に戦地となった戦略的に重要な場所です。元龜2年(1571)から天正7年(1579)までの9年間に攻守が入れ替わりはしましたが、6回武田勢が国安に陣を敷いています。元龜2年3月の信玄による高天神城攻めの際は、武田勢5000の大軍が牧之原の塩買坂から国安河に進撃してきました。小笠原氏義率いる500の兵と対しましたが、短期間の前哨戦で高天神城方が城内に引揚げると、武田勢は追撃しましたが攻め切ることができず、兵を引き帰陣しました。これにより、信玄も落とせなかった難攻不落の城として、高天神城の名が世に知れ渡りました。

所在地  
掛川市国安



11 首取坂の戦い



天正6年(1578)11月徳川家康家臣で横須賀城主大須賀康高は、武田勝頼が相良に新たな城(滝境城か)を築城したと聞き、家臣の渥美源五郎らを偵察に出しました。夜明け近く御前崎市の桜が池の近くで、横須賀城の偵察に来ていた武田隊と遭遇すると、源五郎は大声で呼び、伏兵がいると思わせました。驚いた武田の偵察隊は、態勢を整えるため坂を下ったが、追いついた源五郎により騎兵2騎、歩兵4人、合計6人の首が打ち取られてしまいました。源五郎がその首を家康に献上したところ、比類なき功名と賞賛されたと伝えられています。以後この坂は、渥美源五郎の功績をたたえ、首取坂と呼ばれるようになりました。

所在地 御前崎市佐倉

12 小笠原氏清・竹田重右エ門 供養塔



小笠原氏清(氏興)は今川氏の家臣である春茂の次男で、春茂の隠居により天文11(1542)年、高天神城と馬伏塚城の城主となります。その後、徳川家康が遠江国を支配するようになると、氏清も家康の軍門にくだりました。永禄12(1569)年に馬伏塚城で没し、享年41才でした。竹田重右エ門は天正2(1574)年の高天神城落城後、家康の家臣である大須賀康高の配下となりました。康高により氏清を弔うために了教寺の建立を命じられ、氏清と重右エ門の供養塔は、了教寺の本堂向かって左側に並んで建っています。氏清は花崗岩製五輪塔、重右エ門は砂岩製宝篋印塔などを集めたものでありますが、基礎に重右エ門の戒名が確認されています。

所在地 袋井市浅名了教寺

13 小笠原清広・義頼・氏信・重次 墓塔



小笠原清広・義頼の墓塔

小笠原氏信・重次の墓塔

小笠原清広は春茂の三男、義頼は四男で次男が氏清(氏興)であります。いずれも家康配下の武将で、清広は寛永8(1631)年91才、義頼は慶長18(1613)年79才で没しています。撰要寺墓地の中程の西側に並んで建てられ、いずれの墓塔も花崗岩(岡崎産)製五輪塔で、地輪に戒名が刻まれています。小笠原氏信は義頼の次男、重次は三男であり、義頼とともに家康の家臣として使っていました。氏信は天正12(1584)年の小牧長久手合戦の時に討ち死にし、重次は文禄2(1593)年に没しています。撰要寺墓地の北西隅に並んで建てられており、いずれの墓塔も花崗岩製五輪塔で、地輪に戒名が刻まれています。

所在地 掛川市山崎撰要寺

14 大須賀康高・忠政 墓塔



大須賀康高・忠政の墓塔

大須賀忠政の供養塔

大須賀康高は徳川家康の家臣で、家康の命により武田方に降りました。高天神城を攻めるため、天正6(1578)年、馬伏塚城を廃し、横須賀城が築城され、城主に任命されました。その後、家康とともに甲州攻めや小牧長久手合戦に従軍し、天正16(1588)年、62才で没しました。康高死後は忠政が8才で家督を継ぎ、忠政は慶長12(1607)年27才で京都の伏見で亡くなりました。両名の墓塔は撰要寺の本堂向かって左側に、高さ4m以上もある伊豆安山岩(伊豆石)製の宝篋印塔がそびえ立っています。両塔とも没年よりかなり新しいため、忠政の子で榊原家の養子となった忠次が、しばらくして大須賀家の旧領の地に建てたものと推測されます。また、忠政の代に飛地領のあった森町の梅林院にも、忠政の供養塔と称される砂岩製五輪塔がまつられています。

所在地 掛川市山崎撰要寺、森町森梅林院

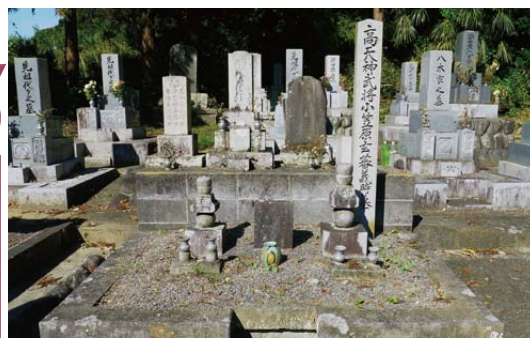
15 本間氏清・丸尾義清 供養塔



本間氏清と丸尾義清はともに丸尾和泉守の子で、後に氏清が本間家に養子に入りました。本間家と丸尾家は親戚筋で、袋井市の欠ノ上村や小野田村を領地としていた武将です。戦国時代には徳川家康の家臣として、高天神城の防備にあたっていました。天正2(1574)年、武田勝頼が攻めてきた際に、兄弟ともに高天神城の防備の要である堂の尾曲輪を守っていました。勝頼方の穴山梅雪らの猛攻に遭い、二人とも討ち死にをし、氏清28才、義清26才のことであります。供養塔は二の丸と堂の尾曲輪間の馬出曲輪に建てられています。かなり後の世に建てられもので、高天神城の戦いの記念碑的な意味もつ供養塔であると思われます。

所在地 掛川市上方領向高天神城馬出曲輪

16 小笠原義時・良忠 供養塔



天正2(1574)年、武田勝頼が高天神城を攻めると、城主であった小笠原長忠(信興)は勝頼の軍門に降りました。これに対して、一族のなかの小笠原義時、良忠は城を出て徳川家康の家臣となりました。義時は清広の長男、良忠は義時の長男であり、良忠は後に紀州徳川家の祖となった徳川頼宣の家臣となり、享年53才で没しています。供養塔は意正院裏山の墓地のなかにまつられています。ごく最近整備された供養塔であり、左が義時、右が良忠の供養塔とされています。

所在地 掛川市小貞意正院





図6

### 馬伏塚城と高天神城関連城跡・墓・寺院位置図

図中の①②番号は前ページの番号と対応しています。寺や個人が管理している場所もありますので、一言ことわってから訪ねてください。

## 袋井市教育委員会・掛川市教育委員会共催特別展 馬伏塚城と高天神城展

協力者 大石展弘 加藤理文 華嚴院 正林寺 尊永寺 戸塚和美 中井均 成瀬京司  
(敬称略) 広島市立中央図書館 碧水社 溝口彰啓 龍樂院

参考図書 浅羽町「浅羽町史通史編」2000年／浅羽町「図説浅羽町史」2001年／浅羽町教育委員会「十二所居館」2001年／岩堀元樹「静岡戦国武将墓巡り」2011年羽衣出版／加藤理文・中井均編「静岡の山城ベスト50を歩く」2009年サンライズ出版／静岡県教育委員会「静岡県の中世城館跡」1981年／大東町教育委員会「史跡高天神城保存管王計画策定報告書」1996年／大東町教育委員会「高天神城跡-二の丸ゾーン発掘調査報告書-」2004年／袋井市歴史文化館「袋井市にゆかりのある武将の墓」2012年(パンフレット)／増田又右衛門・増田実編「高天神城戦史」1969年

編集 袋井市歴史文化館  
〒437-1192静岡県袋井市浅名1028番地(浅羽支所内) TEL.0538-23-9269  
ホームページ <http://fukuroi-rekishi.com>



発行 袋井市教育委員会  
〒437-1192静岡県袋井市浅名1028番地(浅羽支所内) TEL.0538-23-9269  
掛川市教育委員会  
〒436-8650静岡県掛川市長谷1丁目1番地1(生涯学習課) TEL.0537-21-1158